

令和3年度 県立水戸第一高等学校自己評価表

目指す学校像	○授業を中心とした、意欲的で活気ある学習活動を展開する学校 ○生徒が、特別活動(学校行事、ホームルーム、生徒会活動)、部活動など多様な活動機会の中で切磋琢磨し、能動的な経験を蓄積しながらたくましく成長できる学校 ○生徒一人ひとりの進路希望実現に貢献できる学校				
昨年度の成果と課題		重点項目	重点目標		達成状況
【成果】 令和2年度(2020年度)の重点項目に関する11の重点目標の達成状況は、Aが0、Bが6、Cが4であり、総括的には目標を達成できたといえる。Aが0というのは、評価を見直し、ABCそれぞれの基準を厳格に当てはめた上での評価である。 進学状況については、国公立大学の現役合格者数が185名、過去20年で最多となった。既卒者を加えた国公立大学・準大学合格者総数は249名で、昨年から2名の増加となった。難関大学(旧帝国大学、東工大、一橋大)については、前年度は67名のところ、88名合格と増加となった。東京大学は現役20名、既卒3名で、23名となった。また、国公立大学・準大学の医学部医学科合格者は、全国的に厳しい入試が続く中、現役11名、既卒12名の計23名で、昨年より3名の増と健闘した。 特別活動については、部・同好会活動の加入率が9割を超えている。体育部は関東大会に陸上競技部が、文化部は全国大会に吹奏楽部と放送部が出場した。さらにホームルーム活動、生徒会活動も生徒の自主的な運営のもと、活発に行われている。学苑祭(文化祭)・クラスマッチ・歩く会の学校行事は、コロナ禍のため中止や規模縮小となってしまった。 【課題】 令和2年度から医学コースの設置、令和3年度は中高一貫教育校の開校となり、新たな校務分掌の見直しと検証が必要である。そのための情報収集及び情報の発信等、広報活動に努めるとともに、教職員の働き方改革についても引き続き推進する。		教育課程の工夫改善と学習指導の充実	①新学習指導要領の告示及び大学入学共通テストを踏まえ、教育課程の再検討を進める。	B	
			②ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B	
			③コマ数を拡充した夏季課外を円滑に実施し、生徒の進路希望実現に資する学力の向上を図る。	B	
			④60分授業の効果を高めるために、さらなる授業の質の向上を目指して、授業に係る研修機会の確保・充実に努める。	B	
		進路意識の高揚と確かな学力の養成による進路希望の実現	⑤難関大学(旧7帝大+東工大+一橋大)や国公立大医学部医学科等への進路希望実現を支援し、現役進学率の向上及び既卒生を含めた国公立大学合格者数の増加に努める。	B	
			⑥卒業生の協力を得るとともに、大学や病院と連携して高い志を持って医学部に進学し、将来医師として社会に貢献できる人材の育成に取り組む。	B	
		健康安全指導の充実	⑦健康安全に留意し、心身ともに健康で、生き生きとした学校生活を生徒が送れるよう指導する。 ⑧職員が健康で職務に従事できるよう業務精選に取り組み、評価面談で確認する。	B	
		特別活動等の充実	⑨特別活動(学校行事、ホームルーム、生徒会活動)、部活動等の充実をはかり、創造性を養い、自主自立の精神の確立に努める。	B	
			⑩学校行事を適切に配置し、時に臨機応変に対応することにより、各行事の円滑な実施と充実に努め、新たな伝統の創造を目指す。	B	
		将来を見据えた教育活動の拡充、特に医学コースの充実や中高一貫教育校の円滑な運営	⑪社会の変化に対応し、本校から世界に羽ばたく人材、グローバルな視野を持って地域社会の発展に貢献する人材の育成のため、中高一貫教育や医学コースの情報の収集と発信を行いながら組織の拡充に努める。	B	
		三つの方針		具体的目標	
「三つの方針」 (スクール・ポリシー)	「育成を目指す資質・能力に関する方針」 (グラデュエーション・ポリシー)	○社会の変化に対応し、グローバルな視点をもって茨城から世界に羽ばたく人材、高い志と使命感を兼ね備え、地域医療の発展に貢献する人材の育成		B	B ○コロナ禍の中、キャンセルになった活動が多かったが、工夫による継続した取り組みを実践 ○コロナ禍の中、キャンセルになった行事等が多かったので工夫による継続した取り組みを実践 ○継続した方針を積極的に発信
	「教育課程の編成及び実施に関する方針」 (カリキュラム・ポリシー)	○県内の学習指導、進学指導を牽引するリーダー校として、生徒の高い志に対応した教育課程による難関大学及び医学部志望者の進路実現		B	
	「入学者の受入れに関する方針」 (アドミッション・ポリシー)	○真理を愛する学問第一の校風の下、様々な分野に興味を持ち、深く探究しようという強い意欲のある生徒 ○自主自立の精神を重視する自由な校風の下、特別活動、部活動など多様な活動機会の中で切磋琢磨し、能動的な経験を蓄積しながら取り組む意欲のある生徒 ○「至誠一貫・堅忍力行」の気風の下、高い志を持ち挑戦と失敗を繰り返しながら、進路実現を目指して日々努力する生徒		B	

評価項目		具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
国語	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	B	○国語が各教科の学力の基礎となることを意識させて指導していく。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B		○ICT機器を使った、より教育効果の高い授業については、引き続き検討していく。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		○研究構想部主催の研修などに積極的に参加し、学習指導向上に努める。
		国語の学習に対する意欲・関心を高める。	○授業方法を工夫改善し、教員相互に授業を公開するなど、随時教科内における研修等を行い、指導方法に対する研究を深めていく。 ○指導内容・方法・進度について、各学年の担当者間での打合せを綿密に行う。	B	B	○来年度1学年の新科目、「現代の国語」「言語文化」については、特に指導内容、方法、進度に関して綿密に協議していくことが必要になると思われる。
		基礎学力の定着を図り、段階的に難関大学入学試験に対応できる学力の養成を図る。	○小テスト等によって基礎学力の定着を図る。 ○新学習指導要領・大学入学共通テストに対応するための学習指導の在り方について検討を進めていく。 ○適宜添削指導を実施し、難関大学入試に対応可能な文章読解力と表現力の養成を図る。 ○副教材等を利用し、学習内容の活用を図る。 ○定期考査について基本から発展までの設問構成を工夫し、平均点50～60点台の問題を考案する。	A		○語彙力、古典文法、漢文の句法など基礎になる力は2年生までに身につけさせ、3学年での応用的な文章読解力と表現力の伸長に結びつけていきたい。 ○引き続き、定期考査、実力試験、校内模試のそれぞれの目的に即した作問を研究していく。 ○評価のあり方について、教科全体で検討していく。
		自立的な学習を促し、豊かな言語能力を持った生徒を育成する。	○課題等を生徒の実態に即して適宜与え、生徒が自主的に学ぶ姿勢を育み、段階的に自立的学習に移行できるよう促す。 ○読書意欲を喚起し、読書感想文コンクールへの取り組みを奨励する。	B		○3年間を見通した目標設定を生徒に示すことで、自主的に学ぶ姿勢を身につけさせたい。 ○他教科や課題学習とも関連させて、読書意欲の喚起につなげていきたい。
地歴公民	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	B	○各科目とも、大学の学問分野との関連を意識しながら授業を展開してきた。さらに、新課程への対応を検討してきたので、その成果を生かすことが次年度の課題である。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。 ○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	A		○各科目とも、様々な授業形態や指導方法を工夫し、多様な授業を展開することができた。また、電子黒板の活用は定着している。その成果を、深い学びにどう結びつけるかが課題である。
				B		○科目担当者間での打ち合わせを綿密に行うことができた。相互の研究を共有し、教科内での意識をさらに向上させることが今後の課題である。
		綿密な教材研究や授業改善を図るとともに、大学入試問題の研究を継続的にを行い、進路実現のための確かな学力を養成する。	○教員相互間での研修により専門性を高め、生徒の知的好奇心を喚起する授業の実施を目指す。 ○基礎・基本を徹底させるとともに、自ら思考する能力、資料を分析する能力、課題に取り組んでいく姿勢等を身につけさせる。 ○国公立大個別試験、難関私立大学試験、共通テスト等の分析を綿密に行い、授業、定期考査、校内模試等へ反映させることにより生徒の学力向上を図る。	A	B	○1年次では、レポート等を行って主権者意識の高揚を図ることができた。また、グループでの活動を行う等、深い学びを模索した。2・3年次では、資料の活用、大学入試の二次試験問題、大学での学問研究を意識した探究活動など、深い学びを伴う授業展開を行った。特に3年世界史においては、大学入試問題の綿密な分析を基に、効果的な指導を行うことで生徒の学習意欲の高揚をはかり、共通テストにおいて全国的にも高い成績を収めることができた。次年度以降もこの成果を維持するとともに、より深い学びを目指すことが課題である。
		教科研修の充実によって、教員の授業力の向上をはかるとともに、新学習指導要領、中高一貫教育、評価方法の研究を進める。	○科目担当者間での授業の進度、指導方法など綿密な打合せを行い、課題意識を共有し、指導を充実させる。 ○ICT機器やソフトウェアの活用方法に対する研究を継続的に実施していく。 ○新学習指導要領、中高一貫教育に対する研究を継続的に実施していく。 ○生徒の学習活動・能力を的確に評価する方法の研究を実施していく。	B		○新型コロナウイルスにともなう休校期間中は、前年の反省をふまえてGoogleClassroomやClassi等を介して、動画の配信や課題の配信、テストの実施などより多様な授業展開を行い、オンライン授業の効果を高めることができた。中高一貫を見据えた学習活動やよりの確かな評価方法の研究が課題である。

評価項目		具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
数学	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	B	○今後も各科目において、入試問題を意識しながら授業を計画し、到達目標を生徒と共有して行きたい。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B		○更に電子黒板や大型画面を活用し、視覚効果を高めたり、学習内容の定着を効率的に進めて行きたい。ICT機器をより活用することによって授業では、解法を共有する時間を短縮して行きたい。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	A		○コロナ対応でのオンライン授業も含めて、最善な方法を探りながら工夫し実践して行きたい。
	数学	授業に積極的に取り組ませるとともに、自主的に数学に取り組む態度を育成する。	○低学年では予習復習を励行させ、教科書内容を定着させ、入試に必要な基礎力の定着を図る。 ○学年の進行とともに課題の在り方を検討し、低学年では課題等の提出を習慣化させ、高学年では自主的学習に移行できるように促す。 ○学年担当者間の連携を密にし、教材の精選と授業内容の充実に努めるとともに、多様な見方・考え方をを例示するなどして、数学に対する生徒の興味・関心を高める。 ○電子黒板などICT機器の実践事例やノウハウを蓄積し、職員間で共有し実践することで生徒の授業理解の深化を図る。	B	B	○予習のスケジュール感を伝えて、教科書・問題集から自主的に準備をして予習と復習を行わせたい。 ○課題を精選し基礎固めを行い、自らの向学心で向上しようとしていた。 ○授業展開や考查、教材や入試問題の動向について、教員間で情報共有し、深みのある授業を行いたい。 ○お互いに見学したり、新たなものを取り入れながら、理解の進化を図りたい。
		進路実現のための学力向上を図る。	○考查・試験の問題は精選検討を重ねるとともに、結果についても分析を行い、継続的な指導に活かす。 ○大学入試問題等を日頃から研究し、積極的に授業に取り入れ、大学個別入試および新テストに対応できる力をつけさせる。 ○大学入試問題分析会(東京大・京都大・東北大)を実施し、入試問題研究や教材研究により教員のレベルアップを図る。	A		○考查作成時には、担当者間で問題の検討を行い、定着状況を図る目的や応用力の深度を図る目的の問題を今後も精選して行きたい。分析後の講評も行い、生徒には今後の学習への提案をする。 ○教材がどのように発展し、採点を意識した答案づくりを定着させる。 ○今後も大学入試問題分析会(東京大・京都大・東北大)を実施し、入試問題研究や教材研究により教員のレベルアップを図る。
	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	B	○生徒の主体的な取り組みを高めるような指導法・教材・教具を工夫し、授業の中での活動を重視してきた。来年度も、さらなる工夫を進めていきたい。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B		○生徒の授業に対する定着度を観察しながら、各科目において授業内容の充実に努めた。記述や議論など生徒の主体的な活動にも取り組んだ。ICT機器活用は定着しているが、効果的な活用方法を今後も検討していく。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		○新課程に向け、授業内容・教材授業方法などの検討をした。課題意識の共有や新たな情報を吸収し、さらなる指導法の向上に努める。
理科	理科	知的好奇心を育て、科学的な思考力・判断力・表現力が身につくよう、教員の授業力の向上を図り、授業展開を工夫する。	○自然科学の様々な事象現象について深く考察し、科学的な思考力・判断力・表現力を身に付けられるように演示・生徒実験を多く取り入れる。 ○重要な図やデータの考察・理解にデジタル教材の活用を促し、知識の習得と整理がしやすくなるようにする。 ○最先端の科学技術について、授業内で適宜話題に出し、生徒に興味・関心を持たせられるようにする。	A	B	○各学年とも多くの観察・演示・生徒実験を取り入れた授業を行い、レポート提出などを通し、生徒が主体的に理解する姿勢の育てる指導を行った。来年度については、観察・実験においても、一層主体的・対話的な学びの場を工夫して実施し、生徒の理科的思考や態度を身に付けさせたい。
		確かな学力の定着を図ると共に、生徒それぞれの進路希望に応じた学力試験に対応できる学力の養成を図る。	○基本的な原理・法則の理解を深め、さらに問題演習を重ねることで学力の定着を図るために演習量を確認する。また、校内試験ごとに解答の見直しをさせ、基礎学力および応用力の向上を図る。 ○国公立大学個別試験、難関私立大学試験の分析、また、大学入学共通テストに対応できるよう担当教員間での報告・連絡・相談を密に行い、授業や定期考査等に反映させることで学力の向上を図る。	B		○校内試験毎に、テストの見直しをさせ、基礎基本の定着を図ると共に、大学入試の動向を踏まえ、授業や考査にそれらを反映し、学力向上を図った。大学入学共通テストを意識した問題を授業に取り入れ、今後も入試に対応できる力の育成に努めていきたい。
		新学習指導要領や大学入学共通テストに向け、研修の確保・充実を図り、教員の授業力向上・これからの時代に求められる教育のよりよい在り方に対する意識の向上を図る。	○新学習指導要領・大学入学共通テストに対応するための学習指導の在り方や校内模試の在り方など、これから本校の理科教育の在り方について検討を進めていく。 ○主体的な学びや対話的な学びの過程で、ICTを効果的に活用する。 ○ICTの活用などに際しては、教員間でのノウハウの共有化を図るなど研修の機会を設け、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B		○科目ごとに学習指導や指導方法の在り方について話し合いを進めてきた。ICTを積極的に活用し、コロナ禍のリモート授業でも十分に活かすことができた。半面あらたな課題もでてきた。今後は理科全体で技術・情報を共有できる機会を設け、より充実を図ってきたい。

評価項目		具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
保健体育	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	B	○生徒の主体的で深い学びにつなげるために各授業を通じて、生徒が教え合うこと学び合うことを促進したい。進路実現に向けて体力面からも積極的にアプローチしたい。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B B		○指導内容を段階的、系統的に体系化を図り、生徒の伸長に寄与したい。体育実技におけるiPadを効果的に活用する。 ○研修会への参加や教科会を通じて授業方法の改善を図り、生徒の主体的活動の契機としたい。
		歩く会の高い完歩率を維持させる。	○集団行動における規律と態度を学ばせ、有意義な学校生活を送らせる。 ○体力の向上のために計画的な授業を構築し、完歩への意欲を喚起する。	A		○伝統行事の「歩く会」の意義を理解させるとともに、健康面への配慮を念頭におきながらも体力の向上を図っていききたい。
	保健体育	体力テストの底上げを図る。	○本校生は筋力全般が弱いので、体育授業で毎時補強運動を実践する。 ○長距離走への積極的な取り組みにより、基礎体力の向上を図る。 ○本校性の弱い部分(投力)の強化向上を図る。 ○特別活動の体育分野における積極的活動を推進する。	B	B	○基礎体力の養成から体力の向上に繋がり、ひいては全てのライフステージにわたって心身共に健康的な生活や豊かなスポーツライフを送ることができると理解させ、粘り強く生徒の指導にあたっていきたい。体育館長寿命化工事で約1年間体育館での授業が実施できないことから、雨天対策としての種目の検討を進めていく。
		授業時のケガの防止に努める。	○運動の基本動作において、基本となる正しい動き方を身に付けることがスキルの向上のみならずケガの防止に繋がることを理解させる。 ○用具器具の使用について安全第一を心がけ指導する。 ○授業に臨むに当たり、健康観察、コロナ対策、熱中症対策、交通安全に努めると同時に、生徒にも健康安全に対する自意識の向上を喚起する。	B		○基本的なスキルの獲得と安全面への配慮を念頭に授業に取り組むようにする。基本的なスキルは競技性を高めるだけでなくケガの防止にもつながり、安全面の配慮は事故の防止につながる点を踏まえながら指導に努めたい。引き続き新型コロナウイルス感染症防止対策にも取り組んでいく。
		「保健」をとおして心身の健康の保持増進を図る。	○「保健」を通じて、思春期における生徒の健全な成長を促し、地球環境における自らの役割を理解させる。 ○「保健」の授業を通し、思春期における自身の健康課題と社会的な課題における自身の役割を理解させる。 ○ICTの導入及び積極的活用を図る。	A		○「保健」の授業では、各自の健康課題を理解させ、生活実践に活かす指導を行いたい。そのためには、グローバルな視点にも立ちながら各自の健康課題を積極的にとらえる指導に取り組んでいきたい。
		教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B		○基礎的な内容を重視しながらさらに芸術の本質を幅広く深く理解追求する姿勢を意識させ、進路意識もより高まるよう指導を進めた。次年度も継続して行いたい。
芸術	各科共通	充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。 ○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	A B	A	○各単元ごとの目標を明確にし計画的に展開すること、かつ、その目標設定を生徒の意欲がより上がるラインに細やかに設定することで、生徒の主体的な取り組みが活発になった。個別の指導も丁寧に行うことができたので継続していきたい。リモート授業の方法など、音美書で互いに方法を研究し、協力しながら今後も取り組みたい。
						○校外での各種研究会などに参加し、効率のよい実技・実習のあり方を探れた。音美書とともに研修・研究を重ね、充実した授業をめざす。
	芸術	鑑賞の機会を確保するよう努める。感性を高め、人生を豊かにするという意識・態度を育てる。	○校外学習等や校内での鑑賞会を実施して、より多くの作品に接する機会を増やし、本物だけが持つ魅力を体感させ、豊かな感受性と人間性を身につけさせる。 ○様々な作風・ジャンルの作品を取り上げ鑑賞させる事により芸術に対する視野を広めさせるとともに、ものを見つめる目を養い、そこから真実を発見しようとする態度を身につけさせる。	B	B	○コロナ禍により、校外での鑑賞会を実施することはできなかったが、ネットなどを利用した鑑賞の機会を増やせるよう情報を提供した。しかし、やはり本物をクラスメイトと語り合いながら鑑賞することは非常に価値のある行為で、それができないのが残念であった。今後もコロナの状況を鑑みながらも、価値ある鑑賞の方法を探っていきたい。
		自発的に、課題に取り組む姿勢を持たせる。	○実技・実習の時間をできるだけ確保するとともに、その内容を精選し、工夫して実践できるようにする。基礎から応用までバランスの取れた授業内容を目指す。 ○アクティブ・ラーニングを意識した能動的な学習を取り入れ、より活性化した授業展開を目指す。 ○自分の表現を発表する機会を増やし、その表現を生徒同士で共有し理解し合う場面を多く設ける。	B		○積極的に実技・実習に取り組み、内容の充実した作品・演奏を完成させようという姿勢が身に付いた。授業時間ばかりでなく、朝、昼休み、放課後等に自主的に取り組む生徒もいるなど、高い意識で主体的に取り組む姿勢が見られた。作品をつくりあげる過程での意見交換の場面も効果的に取り入れられた。次年度も、本校生に適する基礎から応用までバランスの取れた授業内容を目指したい。
		新たな教材研究に努める。	○新しい展開を生むための教材研究に努めるとともに、教師自身が技術向上の研鑽を積み、高いレベルでの指導ができるよう努める。	A		○幅広い作品についての指導をするため、専門分野や芸術全体に対する視野を広める活動をこころがけた。芸術に関してさらに研鑽を積み、生涯にわたり芸術を愛好する人間の模範を生徒に示したい。

評価項目		具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
外国語	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	B	○生徒の興味関心が高まるような教材を精選し、それらを使った活動を取り入れることで、生徒が主体的に取り組めるように工夫した。次年度も生徒の主体性に高めることができるような授業や課題の在り方について研究していきたい。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A		○各科目とも、担当者間で教材作成や指導方法について話し合い、試行錯誤をしながら改善に努めてきた。次年度も授業内容のさらなる充実に努めたい。 ○教科指導用のタブレットが納品されず、個人のPCで対応せざるを得なかったが、パワポやワークシートを共有して電子黒板を最大限に利用した。次年度は、教科の指導用タブレットを用いた効果的な指導法を探っていきたい。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		○各自が指導力向上に努めるだけでなく、対面とリモート両面で教材の共有と利用法を担当者間で話し合って研修した。次年度も、対面授業、オンライン学習、家庭での課題学習のバランスを工夫していきたい。
	外国語	1年 4技能5領域の統合的な言語活動を通して、総合的な英語力の伸長を図り、実践的コミュニケーション能力の基礎を育成する。	○コミュニケーション英語Ⅰ:受容技能と発信技能のバランスのとれた指導を行い、英文を正しく理解し、コミュニケーションをとるための基本的な知識と技能を養成する。 ○英語表現Ⅰ:場面を意識しながら表現を学び、英作文等でそれを活用することにより、適切に自己表現するための土台を育成する。 ○サイドリーダーや総合問題集等の自主学習課題を授業の内容や評価と有機的に関連づけることにより、自律した学習者としての態度を涵養すると同時に、理解力および表現力の基礎を養成する。 ○試験問題の改良やパフォーマンス評価を通して、信頼性と妥当性のある評価を行い、学習の動機付けに資するような指導と評価の一体化を目指す。 ○1学年3月までに、実用技能検定準2級合格者80%(230名)、2級合格者25%(71名)を目指す。	B	B	○コミュニケーション英語では、1年間で確立してきた4技能5領域の学習スタイルをいかに発展・深化させていくかが新年度からの課題である。より文構造の複雑な文章、語彙レベルの高い文章、抽象度の高い文章を教材とし、総合的な英語力の伸長を図っていきたい。 ○英語表現では、「文法のための文法指導」とならないように、引き続き目的・場面・状況を意識した指導を継続させることが2学年での課題。流暢さに加えて、表現面の正確さを意識しながら、指導していきたい。 ○自主学習課題の取組の質に差が出てきている。課題を授業内容や評価と有機的につなげることと細やかな声かけを通して、生徒の自律的な学習姿勢を育んでいきたい。 ○試験問題やパフォーマンス課題について、その信頼性と妥当性をさらに上げていきたい。 ○次年度も外部検定試験の積極的な受験を促したい。
		2年 英語4技能を使った活動を効果的に行い、正確な英文理解力と表現力を中心に、実践的なコミュニケーション力の基礎を養成する。	○コミュニケーション英語Ⅱ:英語4技能を使った活動を効果的に行い、正確な英文理解力と表現力を中心に、実践的なコミュニケーションを行うための知識と技能を養成する。2学年終了時点で、CEFRB1レベルの力を獲得できるように指導を実践する。 ○英語表現ⅡA:英語で効果的に自己表現するための知識と技能を養成する。GTECグレード4～5に相当する具体性・論理性のあるまとまった英文を書くことのできる力を育成する。 ○英語表現ⅡB:教科書の比較的平易な表現を用いて、発展的かつ実践的な表現力を育む。ネイティブ・スピーカーが単独で授業を行う。 ○サイドリーダーなどの課題学習を効果的に活用し、授業での指導内容と関連させながら、自ら英語を学ぶ力を涵養する。 ○テスト問題の改良や適切なパフォーマンス評価を実施して、生徒の英語力を正確に測るとともに、さらなる学習の動機付けに資するような評価の在り方を考える。	B		○コミュニケーション英語Ⅱでは、4技能をバランスよく養成することを目標に様々な活動を実施した。意欲的に取り組む生徒が多く一定の成果を挙げることができた。三年次においては、より語彙レベルや抽象度が高い文章の読解演習を通して二次試験に対応できる実践的な理解力を養成することが課題である。 ○英語表現ⅡAにおいては学習した表現を用いて、身近な話題について内容のある英文を書く力を養成することができた。より豊かな語彙や表現を用いて具体性、論理性のある英文を書けるように指導を継続したい。 ○英語表現ⅡBにおいてはネイティブの教員と共に、Story WritingやDebateなどに取り組んだ。より発展的な表現力の育成を図っていきたい。 ○動画等で支援を行いながら課題学習を継続することができた。確認テストにも多くの生徒が意欲的に取り組んだ。取り組み方に問題を抱える生徒については個別に対応するなど指導を徹底していきたい。 ○生徒の学習意欲を伸長するテスト問題の作成また評価についてさらに研究を進めていきたい。
		3年 英語4技能の習熟に努めながら、より発展的な理解力および表現力を育成する。	○英語表現Ⅱでは、1・2年次に培った文法力を土台とした、より正確に作文する技能を指導する。さらに、読んだり聞いたりした事柄について、自分の意見を論理的に表現する力を養う。 ○リーディング演習では、抽象度の高く比較的分量の多い文章に対する正確で論理的な読解力(解釈力)や、要約力を高める。 ○英語表現Ⅱおよびリーディング演習の授業をととして、大学入試にも対応できる総合的な英語力を養成する。 ○夏季課外や個別の添削指導などにより、個々に応じた指導に努める。 ○英検等の受験を引き続き促し、英語の実践的運用能力を高める。	B		○検定教科書から入試問題演習への切り替え(タイミング・程度)がやや性急ー演習一色になってしまったーだった。夏季休業前までは、両者のハイブリッドが必要だった。離陸のタイミングを見極めることが大切だ。 ○「自立した学習者」を念頭に置きつつも、時代や世代とともに変化する生徒の気質や保護者のニーズにも注意を払いつつ、きめが細かい手当を必要に応じてすべきだと思われる。 ○幼少期からの読書体験の質量の差が、3年次後半の成績慎重に大きく作用したようだ(実感・客観データはない)。母国語の大切さをより説得的に伝えていく必要がある。読解力の向上を中長期的課題として、併設校の強みを生かし、中高で共有したい。

評価項目		具体的目標	具体的方策	評価		次年度(学期)への主な課題
家庭	各科共通	教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	A	A	○将来に向け一人ひとりが主体的に取り組めるように、用具に整備や2展開の授業を実施した。次年度以降も引き続き、用具の整備等を行っていきたい。
		充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A		○教員間で教材や指導方法の共有を十分に行うことができた。次年度は現状で安心・安全に実施できる実習・実験方法を検討していきたい。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		○生徒の実態や社会全体の傾向い合わせた「主体的・対話的で深い学び」を育成するための授業展開を構築していきたい。
		基礎・基本の内容を体験を通して理解させ、問題を見つけ、よりよい生活に変えていこうとする態度と生きる力を育てる。	○実験・実習内容を工夫と精選をし、知識と体験の定着を図る。 ○各分野における変化や問題を自分事として捉えられるように、高校卒業後の自分の人生に反映していこうとする態度が身につく授業の展開を図り、自ら学び自ら考える力を育てる。	B	B	○休校等の影響により、実験や実習の十分な時間の確保が難しかった。次年度以降、再度年間計画を見直し、生徒一人ひとりの生活力の向上に努めたい。
		各分野の関連性・重要性を見だし、日常生活と比較させることで、主体的・総合的に生きようとする意識・態度を育てる。	○夏休みに各家庭で実施するホームプロジェクトでは、4月からの授業の中で全員が計画的に進めていけるように支援し、日常生活の中の問題点・改善点を認識させ、生活の質の向上に結びつくように工夫する。	A		○ホームプロジェクトは、夏季休業中の課題として実施できるように4月初回の授業から計画的に進め、一人ひとりに合った課題解決への支援ができた。今後も計画的に指導していきたい。
		教科指導全般	○生徒が主体的に学習に取り組むよう、進路意識を高揚させながら指導する。	B	B	○進路を意識させた指導に力を入れていきたい。
情報	各科共通	充実した授業を展開し、各教科・科目の目標を達成する。	○60分授業の効果を高めるため、授業の進度や指導内容を再構築し、授業内容の充実に努める。 ○ICT機器(タブレット及び電子黒板)を活用して、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	A		○課題解決学習においてもタブレットや電子黒板の活用に関心をもち、力を入れていきたい。
			○60分授業を生かした指導方法等のさらなる改善を図るための研修を実施する。	B		○共通テストでの「情報」導入を踏まえた指導の方法をさらに研究していきたい。
		新学習指導要領を見据えた授業を実施する	○新学習指導要領の「情報Ⅰ」を意識した授業構成にし、次年度へ円滑な移行ができるようにする。 ○オンライン教材を導入し、プログラミング等で生徒がその習熟度に応じた学習ができるようにする。	A		○プログラミングの学習においてオンライン教材を導入しているが、思考・判断する場面の不足を感じているので指導方法を改善していききたい。
		学習活動を通じて、情報モラルに対する知識・理解を深め、適切に行動できるようにする。	○動画視聴や事例検証等を通して当事者意識を持たせ、情報モラルの着実な定着を図る。	B	B	○より効果的な方法を模索していきたい。
		プレゼンテーションにおける表現能力の向上を図る。	○生徒が各自のテーマに基づいてプレゼンテーションをおこない、それに対して改善点等を話し合うなど、より内容を深める活動をおこなう。	B		○プレゼンテーションについてはより効果的な表現方法について研究させていききたい。
		生徒が情報科で学んだことを、他教科の学習や特別活動に生かせるようにする。	○Google Workspace for Education 等の活用について指導し、生徒が他教科の学習や特別活動においてもICT機器を有効に活用できるようにする。	A		○Google Workspace for Education 等の活用について生徒は慣れしてきた印象を受ける。新しく追加された機能もあるので広報していききたい。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
教務	授業時間を確保する。	○自習をできるだけ避けるため、早めに出張・年休を把握し、可能な限り授業交換をする。その際、交換による授業のアンバランスにも配慮する。さらに、授業の曜日変更により、定期考査間の授業時数の均一化をはかる。また、昨年度より拡充した夏季課外を円滑に実施する。	B	○定期考査間の授業時数については、新型コロナ感染拡大に伴う休校期間があったため、例年ほどではなかったものの曜日変更をすることで均等に近づけることができた。今後も工夫して行きたい。
	授業内容のさらなる充実を図るとともに、併せてICTの活用を推進する。	○60分6時間授業をより充実したものとするため、研究構想部と協力して、教員相互による授業研究などを実施する。また、今年度より導入されたWIFIを利用した授業展開を推し進めて、より教育効果の高い学習指導の充実に努める。	B	○中学校では、生徒全員に端末が貸与されているため、常時ICTを活用した授業が展開された。高校では、教師向けの授業用パソコンの貸与も進み、授業のICT化がさらに進んだ。9月の休校期間中も高校1年生では生配信のオンライン授業なども実施できた。今後もICTの利活用に努めたい。
	令和4年度以降の教育課程の検討をする。	○令和4年度から実施される新学習指導要領に基づいて、単位制を活用した、より教育効果の高いカリキュラムの構築を目指すとともに、大学入試制度の変更を踏まえて教育課程の検討を行う。また医学コースの設置や中高一貫教育校に向けて各教科・分掌と連絡を取りながら教育課程を検討する。	B	○共通テストの実施科目が明らかになり、数学と情報で教育課程の変更が必要になったが、本校に適した教育課程に編成し直すことができた。今後も柔軟な対応を心がけたい。
	教育活動を公表する。	○学校説明会委員会や研究構想部と連携して、中学生対象の水戸一高説明会、学習塾対象説明会の実施により学校を公開する。また、同時に地域住民等に広く水戸一高の教育理念を周知する。	B	○新型コロナ感染拡大に伴い、今年度も本校に招いての学校説明会は中止としたが、昨年同様にWEBによる動画配信などを行った。一方、学習塾対象の説明会は、参加人数を各校1名に限る形で実施したが、学校公開当日に同時開催する形式も2年目を迎え定着してきたといえる。来年度も積極的に公表する機会を設定したい。
	統合システムを円滑に運用する。	○支援システムの円滑な運用を進めるために、管理体制を見直すとともに、使用法の徹底や活用法の研究をする。システムの効率的運用で教員の授業研究時間の増加を見込む。	B	○支援システムの管理体制を見直し、活用法の研究を進めることができた。またシステムの効率的運用で教員の授業研究の時間も増加も進めることができた。今後は運用能力向上のための研修機会を積極的に設定していきたい。
	学校行事を各分掌、該当学年と連携して円滑に実施する。	○入学式・卒業式を、関係する学年や各分掌と連携、協力して円滑に実施していく。 ○新型コロナ感染症拡大にともない、ICTを活用した儀式の実施など、今後も学校内外の状況変化に対応して各行事の企画・運営にICTの活用を図っていく。	B	○新型コロナ感染拡大防止の観点と行事の意義を考慮しながら、各行事を実施の仕方を考えていく必要がある。
	奨学会関係の事業を、各分掌、各学年と連携して円滑に進める。また、同窓会との関係を深め、諸事業に協力する。	○奨学会との連携・連絡を適切に行い、奨学会総会並びに奨学会役員会の企画・運営を、各分掌、各学年と協力して円滑に進めていく。 ○保護者や学年への連絡・報告を適切に行い、様々な学校行事が円滑に進められるように内容を工夫改善していく。 ○同窓会との連携・連絡を適切に行い、諸事業に協力していく。 ○高等学校PTA連合会関連行事を用いて、本校教育活動の発信に努めていく。 ○併設中学校の保護者組織について検討を進める。 ○学校内外の状況変化に対応した各行事の企画・運営について研究を進める。	B	○新型コロナ感染拡大の影響を受けて、奨学会、同窓会、高等学校PTA連合会などすべての活動が制限、縮小されているので、これまで受け継いできた活動を途切れさせないようにする方策を研究していきたい。
	奨学金関係事務を適正に実施する。	○奨学金関係の事務および奨学生の選考に関する事項等を、ICTも活用しながら適切に行っていく。	A	○次年度も、奨学金関係の事務および奨学生の選考に関する事項などを、ICTも活用しながら継続して適切に行っていく。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
特別活動	学校行事を通じて、本校生としての一体感と誇りを持たせ、学校生活を充実させる。	○各委員会生徒と密接な連携を図り、明確な活動計画の基で各行事の運営を行う。 ○天候やその他の理由により計画通りにいかない場合に、適切な判断ができるよう、あらゆる事態を想定しリスクに備えるとともに、柔軟な生徒へのケアをおこなえるよう準備しておく。 ○積極的な生徒会活動への参加を促し、主体的な運営ができるよう指導する。 ○学習活動や他の諸活動とのバランスをとり、学校行事の充実度85%以上を目指す。	B	○生徒会および各委員会生徒と密接な連携により、計画的な行事の運営がおこなえた。またコロナ対策、天候等による突発的に臨機な対応を求められるなかでも、日頃の生徒との信頼関係の構築から、より適切な対応ができた。そこには自主・自立を尊重しながらも、適切な距離感で指導すること、生徒の成長を窺うことができた。 さらに積極的かつ主体的な生徒会、委員会活動になるための効果的な指導法、また生徒の創造性を高める指導法を継続的に検討していきたい。中学生との合同の行事では、高校生としての自覚が生まれ、模範となるような自覚が生まれる姿も見られた。
	部活動を通じて、豊かな感性と健全な心身を育む。	○部活動と学習活動を両立している生徒の割合、80%以上を目指す。 ○各部活動で、活動方針、目標、活動計画を策定し、活動の充実・成績の向上を目指す。 ○各団体の設備、備品の管理を徹底させる。	B	○部活動の加入率は高く、向上心をもった積極的な活動が、各種大会、コンクール等、校外活動の結果からも窺えた。今後も学業との両立の観点も踏まえ、各部とも休養日等、適切な配慮のもと活動をおこなっていききたい。 コロナによる活動の制限など、生徒にとっては、意欲に影響が出てしまうところも、各顧問の細やかなケアにより、意欲も落とすことなく、また、大きなクラスターを出すことなく安全な活動ができた。今後も継続したい。 中学生体験では、高校生としての自覚が生まれ、模範となるような自覚が生まれる姿も見られたので、今後も工夫した取組をおこないたい。
	HRにおいてキャリア・パスポートを活用する	○各学年のHRにおいてキャリア・パスポートを作成し、社会の中での自身の在り方を考える。	B	○各学年でキャリア・パスポートを応用した指導がおこなわれ、適切なキャリア教育がなされている。 今後も本校に適した書式や在り方を模索していく必要がある。
進路指導	生徒を自己理解に根ざした高い進路目標へと導き進路希望の実現を支援する。同一年度の卒業生に関して、現役時と卒業後の合格者合計で、難関大学(旧7帝大+東工大+一橋大):80名、医学部医学科:25名、国公立大:220名を目指す。	○1・2学年と連携し、生徒の進路意識の高揚を図るとともに、授業を中心とした主体的かつ計画的な学習を促進させる。 ○コロナウイルスの影響で不確定な要素があるが、生徒が大学のオープンキャンパス(WEBも含めて)に明確な目的意識のもとで積極的に参加し、得たい情報を自らすすんで獲得しその活用がはかれるよう、学年との連携のもとで事前・事後の指導を強化するなど、その指導の在り方の工夫に努める。 ○東大を含めた難関大の研究を通じて、「難関大研究会」の機能をさらに強化し、学年間の情報共有に努め、進路希望の実現に結びつける。 ○大学入学共通テストに関して、学年や教科と連携し、定期考査等での出題の工夫をはじめとして新傾向の問題へ十全な対応を進める。 ○医学コース関連のプログラムを円滑に実施し、キャリア教育と学力増進の両面で医学科を志望する生徒への一層の指導の充実を図る。	B	○進路意識の高揚については、1・2学年団による積極的な生徒への働きかけが年間を通じて計画的に実施され、十分にその目標を達成できた。また、オープンキャンパスについては、今年度もコロナウイルス感染症の影響で従来の形では実施されなかったが、1・2学年を中心に丁寧な指導のもとで、WEBオープンキャンパスの視聴や、インターネット等を使った「大学調べ」などが生徒個々に進められた。次年度についても状況に応じたより効果的な指導の工夫していく必要がある。 ○進路からは予備校等から集めた難関大に関する各種の分析データを学年に提供し、学年では生徒の状況と照らしながら東大研究会を中心とする難関大研究会等が、各学年各々の問題意識を反映した形で、新たな取り組みも交えて効果的に実施された。次年度もこれを続けていく必要がある。 ○大学入学共通テストについては、教科において対応が進んでいる。実施2年目となる今年度の問題についてもしっかりと分析した上で、個別試験への対応を柱としつつ、しっかりと調整を図っていく必要がある。 ○医学コースの事業については、コロナウイルス感染症の影響が大変大きく、中止に追い込まれる行事等も出た中で、オンラインでの実施に切り替えるなど、出来得る限りの指導を医学科志望者に向けて行うことができた。次年度も同様の制約を受ける可能性が残るが、その中でより有効な指導を工夫していきたい。 ○数値目標の達成度については、3月の結果を待つ。
	学年との連携を図り、生徒や保護者に、機を捉えて適切な進路情報を提供する。	○学年と連携し、進路講演会やガイダンスを通して、情報提供と生徒の啓発に努める。保護者に対しては、保護者対象の進路講演会や医学部進路講演会等も実施し進路情報の提供に努める。 ○生徒・保護者・教員の3者にとってより有益なものとなるよう「進学資料」、「進路の手引き」の改善を進める。	B	○学年との連携のもとで生徒対象の進路講演会を、それぞれ目的に応じて実施した。1・2学年については別個に保護者対象の進路講演会も実施し、多くの保護者のご参加を頂いたが、変わりゆく入試制度のその方向性や現状について、最新の情報を提供することができた。 ○1・2年生の医学部志望生徒の保護者を対象として、「保護者向け医学部講演会」も実施し、医学部入試の現状や医学部の実施等についてもお伝えすることができた。
	生徒のデータを3年間通して見渡せる進路情報システムの改良と、その活用への環境整備を進める。	○3年間の学習成績と最終的な大学の合格がリンクした形でデータベース「佐々木システム」について、今年度も新たにデータの更新を行い、職員研修等を実施し、進路指導における有効活用をはかる。またこのデータベースを活用して指導に有効と思われる出力形態についても研究を進め、活用の中を広げていく。 ○現役時はもちろんのこと浪人した生徒も含めて、進路確定まで継続的な指導を行う。	B	○第3回校内模試や1・2年次の実力テストの成績と、現役時及び浪人時の大学の合格が、大学、学部、学科別等で検索できるシステムが一昨年度完成し、今年度はその活用を進めることができた。今後もデータを追加・更新し、さらに利用しやすさと信頼度を高めていきたい。 ○旧3学年による浪人生への激励会が年2回実施され、また、個別の相談にもしっかりと対応することはできた。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
研究構想	「チャレンジ・プロジェクト」(プロジェクト「図南2」ー21世紀型スキルを備えたリーダーの育成ー)を充実させる。	○「心に火をつけるフォーラム」、「社会人インタビュー」、「校風理解(講演会)」、「大学模擬講義(5教科主催)」等の行事を通して、自分の在り方や生き方、進路について考えさせる。 ○課題研究や「知道プロジェクト発表会」を通して自ら課題を発見し、多様な視点から論理的に考察する力や自らの考えを他者に上手に伝える力を培う。 ○将来リーダーとして社会貢献のできる人材育成を目指す。	A	○「チャレンジプロジェクト」事業による様々な行事を通して、生徒の学ぶ意欲や社会貢献の意識を喚起することができたが、過密スケジュールになることが避けられなかった。次年度は行事の見直しが必要である。 ○「課題研究」では、筑波大学教授による指導を昨年より充実させた。「クラスでの発表会」、代表による「知道プロジェクト発表会」を実施し、論文の質およびプレゼン力が向上した。次年度は、第三者評価として、文化センターでの発表会の講評を大学教授に依頼する予定である。
	教員の授業力向上を図る。	○「新任者授業見学会」、「校内授業公開」による校内での実践研修および、「筑波大学附属高校等の教育研究大会」、「駿台教育研究所の教育研究セミナー」等による校外での指導法研修を行い、質の高い授業を研究する。 ○「校内教員研修会」、「県外進学校視察」等を行い、難関大学進学指導やHR経営等の知識やノウハウを蓄積・継承する。	B	○「校内授業公開」では全教職員による相互授業参観に取り組み、授業力向上を図った。分散登校期間はオンラインでの授業実施も昨年よりスムーズに実施できた。「校外での指導法研修」は、オンライン限定で実施した。 ○「校内教員研修会」では、本校のベテラン教員による発表により、今後の指導のヒントを得る機会となった。「県外進学校視察」は、感染症の影響で中止になってしまった。今後、オンラインでの交流も検討する必要がある。
	開かれた学校づくりを推進する。	○中高連携や、高高・高大連携を推進し、相互に連携・交流を深める。 ○「学校公開」や「道徳公開授業」を行い、本校の教育活動や取り組みを広く周知する。	B	○「中高連携」は、「海外派遣プログラム」が「国内研修」になり、実施できなくなった。「高大連携」に関しては、高校生講座が実施されなかったが、「知道プロジェクト」の指導と、「大学模擬講義」等を実施した。 ○「学校公開」は、「道徳」の授業を含めて午後の3時限を公開授業し、学習活動での高い評価を得ることができた。今年度は、附属中学校の公開も同時に実施したため、予想以上の参加者が集まり、参観者の案内が十分にできなかった。次年度は、実施方法の見直しが必要である。
	充実した教育活動により、未来を担う人材を育成する。	○「総合的な探究の時間」を通して進路意識と探究心を刺激し、自らの将来像を考えさせる。 ○「道徳」「道徳プラス」を通して、道徳的判断力や道徳の実践意欲・態度を育成する。 ○『学習のしおり(シラバス)』、『課題研究優秀論文集』、『海外派遣プログラム報告書』、『紀要』、『本校独自の道徳ノート』を作成し、3年間を見通した学習の計画や1年間の教育活動の振り返りに資する。	B	○「道徳」の授業を、「道徳ノート」を利用して効果的に実施できた。「シラバス」の在り方に関しては、次年度検討していきたい。 ○「課題研究優秀論文集」「紀要」等により、1年間の教育活動を振り返り、次年度もグローバルリーダーの育成を目指していきたい。
生徒指導	基本的生活習慣の確立を図る。	○挨拶の励行。特に来校者に対しては、積極的に挨拶をするよう指導する。 ○校外・地域等に進んで貢献・奉仕しようとする意識を持たせる。 ○規範意識を高め、水戸一高生として誇りの持てる行動をするよう指導する。	B	○ほとんどの生徒は挨拶の習慣が定着しているが、一部の生徒に不十分が見受けられる。生徒に挨拶の習慣を定着させ、外部の方と会ったときも自然と挨拶ができるように取り組んでいきたい。
	学校生活の安全を図る。	○思いやりのある豊かな人間性を養い、人間関係を円滑にし、水戸一高生としての自覚と責任ある行動をとるよう指導する。 ○各学年・保健厚生部・養護教諭との連携を密に、生徒の状況を正確に把握し、生徒の心身の健全な育成を目指す。 ○インターネット依存症防止のために、スマートフォン等の適切な使用法を指導する。 ○インターネット上で個人やグループに対する誹謗中傷や、SNSでのいじめ、仲間はずれ、個人攻撃などをしないよう指導する。	B	○全体として「他者を思いやること」「水戸一高生として自覚のある行動をとること」ができており、落ち着いた学校生活を送ることができていた。スマホ活用のルール作りを年度当初行うことで、目立った使用についてのトラブルを避けることができた。1年対象「薬物乱用防止教室」・地域の防犯パトロールや駅周辺巡回指導などを実施し、安全な学校作りに結びつけることができた。今後とも、地域や各学年等と連携しながら対応をとっていきたい。保健厚生部などと連携して、アンケートを実施したり、カウンセリング等による生徒の精神面のサポートをしたりすることができた。
	交通安全の意識を向上させる。	○自転車は車道の左側通行など、交通法規の遵守を徹底させる。 ○自転車による交通事故ゼロを目指す。通信機器等を操作しながら、またはイヤホンを使用しながら運転をしないなど、安全な自転車の乗り方を指導する。	B	○一年生に軽微な自転車における交通事故が目立った。交通安全やイヤホン使用運転をしないよう、掲示物や、朝の昇降口での呼びかけなどを実施し引き続き注意喚起を促していきたい。
	いじめ問題に適切に対応する。	○いじめの未然防止にいつそう努め、いじめのない学校を目指す。 ○いじめを早期発見するために、各部署との連携を図り、職員全体で情報を共有する。 ○教職員対象の校内研修を実施し、いじめに対する意識を高める。 ○インターネットの適切な利用を指導することで、インターネット上のいじめを防止する。	B	○いじめ対策会議を定期的で開催し、情報を共有することでいじめの未然防止に努めた。ICTを活用し、3回ほどアンケート調査を実施することができた。今後も継続して会議を開催したり、教員研修を行ったりしながら、いじめなしの学校をめざす。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
情報	ICT機器の整備・管理・運用を適切に行う。	○GIGAスクール構想に基づき、校内におけるICT機器を適切に配備する。 ○内規や管理室(仮称)の整備により、ICT機器の適切な管理・運用をおこなう。	A	B
	学校Webページの充実を図る。	○教員間の連携を密にし、情報の発信が迅速かつ正確に行えるようにする。 ○Webページのレイアウトや項目等を見直し、生徒の活動の様子がより見やすく、効果的なものになるようにする。	B	
	教育の情報化へ向けた支援活動を行う。	○新学習指導要領の実施に向け、各教科が教育の情報化を進められるように、ICT機器(タブレット、電子黒板等)やソフトウェアにおける支援を進める。 ○職員室の自席で先生方がPCを用いた作業ができるように、環境整備を進める。 ○他分掌、学年との連携を強化し、情報部として可能な支援を引き続き推進する。 ○個人情報の管理やウィルス対策等の注意喚起・情報提供をおこなう。	B	
	効果的な学校評価アンケートを実施する。	○質問項目を見直し、より一層学校運営に生かせるようにする。 ○アンケートのペーパーレス化を進めるとともに、保護者からの回収率を上げる方策を実施する。	B	
図書	自ら課題を発見し学ぶ生徒を支援する図書館として一層の充実を目指す。	○図書管理・検索システムのアップデート情報に留意し必要な場合は適用を検討する。 ○教科からの授業内容に関連する推薦図書情報を得て、レファレンス・展示等をおこない、貸出し利用に繋げる。 ○選書について、多様な興味関心をもつ生徒にできるだけ扱い、中学生向け選書にも配慮をしてゆく。	B	B
	読書体験ができる機会を設け啓発し、読書に親しむ生徒の増加を図る。	○総合的な学習の時間(課題学習)での利用をはじめ、生徒一人ひとりの学習で一層の図書利用が進むように館内POP展示・新蔵図書紹介を進める。 ○読書会、ビブリオバトル等のイベントを感染状況に留意しつつ開催する準備を進め、生徒どうしの読書体験の共有・啓発運動を行う。 ○各種読書コンクールへの積極的応募を勧め、読書への興味をさらに高める。	B	
	生徒委員会活動のさらなる活発化を目指す。	○毎日のカウンター当番等を活動の基盤としながら、生徒委員の学苑祭・読書会運営、機関誌編集などを主体的に運営できる生徒の育成をめざす。 ○感染拡大により、大きな活動やイベントができないときに備え、より小さな生徒単位で行える効果的な方法について検討、実施を進める。	B	
	機関誌を着実に発行し、本校の歩みを正しく記録する。	○年報の発行に向けて、編集方針検討や資料収集作業を着実に行う。 ○図書館報2誌の制作を計画的に行い発刊する。	B	
				○ICT機器管理室が整備できたので、使いやすい部屋にしていきたい。 ○学校における生徒の様子が知りたいという保護者からの要望に応えられるようにしていきたい。 ○引き続き効果的なレイアウト、コンテンツ作りに努めていきたい。 ○教員用タブレット(iPad)が令和3年度内に納入される見通しが立ち、すべての教員に教員用タブレットが行き渡るので、さらに支援をしていきたい。 ○先生方のICT環境整備改善を進めていきたい。 ○保護者からの回答率は前年比5ポイント増であるが、ペーパーレス化を推進していく上で、より確実な連絡方法を模索していきたい。
				○図書管理・検索システムの機材更新を検討する(ウィンドウズOS対応)。 ○教科・学年との取り扱い内容について情報交換をさらに進め、展示や紹介につなげられるようにする。 ○生徒の関心を広げ学習の興味関心を増進できるよう、幅広い分野から選書し、引き続き中学生向け選書にも配慮する。 ○一層の図書利用が進むように、継続して館内POP展示・新蔵図書紹介を行っていく。 ○感染状況を確認しながら、読書会やビブリオバトル等の体験を増やし、生徒どうしが刺激しあえる読書体験を検討・実施する。 ○中高生ともに、各種読書コンクールへの積極的応募を促し、読書と親しみ、読書を通して自ら教科学習内容や生き方を学ぶ生徒を育む。 ○対面業務のため感染状況の悪化に伴い実施が困難となる生徒カウンター当番の活動以外にも、書籍の書架戻し・配架、メンテナンスなどの図書館運営を体験させ、新しい活動をととして生徒が主体的な行動がとれるよう促す試みを行っていく。 ○イベント的活動ができないときに備え、引き続き小さなグループで実施できる読書会などの実施を進める。 ○中学のサテライト文庫を中学生委員の活動として引き続き行っていく。 ○年報の発行に向けて、引き続き編集方針検討や資料収集作業を着実に行う。 ○図書館報2誌の制作について生徒の発案をできるだけ生かし発刊する。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
保健厚生	学習環境の整備に努める。	○校舎内外の美化活動の取り組みを推進する。また、当分新型コロナウイルス感染症防止のため、教室等のゴミ箱が使用禁止のため、ゴミの持ち帰りを徹底させる。 ○教室内・各教科準備室等の空気・照度検査、飲料水の水質検査、ダニの検査を実施する。 ○モップ交換や普通教室のカーテンのクリーニング、ワックスがけを行う。 ○施設・設備の安全点検を行い、環境の安全の確保を図る。 ○中高一貫に伴い、カウンセリング室の整備を継続して行う。	B	B ○モップ交換、ワックスがけを通して学習環境を整えることができたが、清掃がきちんとされていない箇所も見受けられるので、清掃の徹底を呼びかけていく必要がある。 ○トイレの洋式化に伴った清掃方法、清掃用具の検討が必要である。 ○コロナ災いが続くことが予想されるので、今後もゴミの持ち帰りを呼びかけていく。 ○カウンセリング室の整備が必要である。 ○授業中の構内巡視の際、保健室を利用する生徒もいるので、両立できるような体制づくりを考える必要がある。
	心身ともに健康的な生活習慣の確立に努める。	○健康診断や保健室利用時などの機会をとらえて、保健指導を行う。 ○事故・怪我等がないように、注意を払いながら学校生活を送るよう指導する。 ○新型コロナをはじめとする感染症に対する予防を徹底するよう指導する。 ○各学年、生徒指導部、スクールカウンセラーとの連携を密にして、生徒の心身の健全な育成を目指す。 ○健康に関する情報提供のための「保健だより」を、毎月1回発行する。 ○災害時における避難訓練を中高合同で行い、校内の状況と避難経路を確認し、防災に対する意識を高めるよう指導する。また、休日や校外においても緊急事態に対応できるよう意識づけを図る。	B	
1学年	基本的生活習慣の養成を図る。	○挨拶を中心とした、誠実な態度を身につけさせる。 ○自主的な時間管理を意識させ、時間の大切さを再認識させるとともに、時間厳守を心掛けさせる。 ○規範意識を醸成し、高めさせる。	B	B ○入学当初より、基本的生活習慣が身につけている生徒が多く、年間を通して落ち着いて学校生活を送ることができた。また、学年全体で支援を要する生徒の情報を共有し、保護者や養護教諭と連携しながら継続的に対応することができた。規範意識の面では、ごく一部の生徒にやや心配な行動も見られたので、今後も注意深く見守り、成長を促していきたい。 ○各種進路行事や講演会などにより、学問的興味関心が喚起され、文理選択を考える契機となった。また、大学模擬講義や数学オリンピック予選等に参加し、刺激を受け、より前向きに学習に取り組む生徒の姿が見受けられた。学習については、やや二極化している現状を改善すべく、予習、授業、復習の学習サイクルを徹底し、なお一層の家庭学習時間の確保を促していきたい。 ○部活動や委員会活動に積極的に参加しており、すでに上位大会への出場を果たしている生徒も出てきた。次年度は、特別活動において中核をなす学年となるので、学年全体としてその自覚を促し、引き続き支援していきたい。
	自主自律的学習習慣の養成を図る。	○各種進路行事に参加させ、進路意識を高めさせる。 ○各教科主催の大学模擬講義、数学オリンピック等への積極的な参加を促し、刺激を与え、知的好奇心を高める。 ○予習、授業、復習の学習サイクルを徹底させる。また、家庭学習時間を確保させる。	B	
	特別活動への積極的参加を促す。	○学校行事、部活動、委員会活動への積極的な参加を促す。 ○各種大会への積極的な参加を促す。	B	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価	次年度(学期)への主な課題
2. 学年	基本的生活習慣の養成を図る。	○挨拶、時間厳守の大切さを各ホームルーム、学年集会などで話し、実践できるようにしていく。 ○傾聴力を養成し、人の話をしっかり聴き、落ち着いて行動をすることができるようにしていく。 ○定期的に生徒面談を実施することにより、個別の生徒への対応を丁寧にしていく。	B	○挨拶や時間厳守など基本的生活習慣についての目標は概ね達成できた。集会において話を聴く姿勢はよくできている。多くの生徒は落ち着いて生活を送ることができている。各HRでは定期的に面談を実施し、生徒の抱える進路や生活上の問題を共有し、対応することが出来た。次年度は3年生になり、多くの困難が生徒たちを待ち構えている。より手厚く生徒たちをフォローしていく。
	高い進路目標を掲げ、自主的に学習に取り組む習慣の養成を図る。自ら課題を見つけ、解決していく能力を育成する。	○各種進路行事に積極的に参加をさせることで進路意識を高めさせる。 ○各教科主催の講演会、数学オリンピック、科学の甲子園に積極的に参加をさせ、知的好奇心を高める。 ○週末課題、長期休業時の課題を用意し、家庭学習時間を確保させ、基礎基本の徹底を図る。また、学校からの課題だけでなく、段階的に自発的な学習に取り組めるように促す。 ○1年次の探究学習を発展させた課題研究に、十分取り組むことができる機会を設ける。	B	○各種進路行事や講演会などにより、特定の学習内容への興味関心は高まった。しかし、普段の学習では、まだ受け身の生徒が見られる。次年度では主体的な学習への取り組みが出来るようにしていかなければいけない。課題研究は研究構想部と連携を取り、時間を十分にかけ取り組ませることが出来た。
	特別活動への積極的参加により、強い精神力や協調性を育む。	○学校行事、部活動、委員会活動への積極的参加を促す。 ○各種大会へ積極的参加を促す。	A	○委員会活動や部活動には多くの生徒が積極的に参加している。上位大会で活躍する生徒も出てきた。次年度、生徒たちは各活動において責任ある立場を担うことになる。最後までしっかりと取り組ませていきたい。
3. 学年	進路実現にむけ主体的な学習の実践を図る。	○進路情報を精査し、高い進路目標を設定するための指導・支援。 ○授業を中心とした主体的かつ計画的な学習の促進。 ○新しい社会の中での進路実現にむけた意識醸成のための指導・支援。	B	○変化する学校の枠組のなかで、ここまで行ってきた進路指導の方法について見直す時期に来ていると感じている。特に一般入試以外の入学方法についても、ある程度情報を伝え、希望者にはサポートを行うことが必要になる時期が遠からずきていると感じる。
	親和寛容の精神を涵養し、精神的自律を図る。	○自己肯定感を高め、個性を活かすための支援。 ○個性や才能を伸ばし社会貢献しようとする進取の精神の獲得にむけた指導・支援。 ○社会の一員としての教養と品格を獲得するための指導・支援。	B	○精神的に幼さが残る印象の学年であったが、少ない行事のなかでも成長を見ることができた。今後もコロナ感染の影響を受けることになると思われるため、新しい方法で生徒の成長を促すことも必要だと思われる。
	規範意識および基本的生活習慣の確立を図る。	○新しい社会構造のなかでも通用する普遍的な規範意識確立のための支援。 ○学校生活における時間厳守、挨拶・清掃活動の励行促進。	A	○おおむね問題なく進められたが、今後は18歳成人とジェンダーに関連するマナーなどについても伝える必要性についても検討すべきである。

※評価基準 A:十分達成できている B:達成できている C:概ね達成できている D:不十分である E:できていない